

Wilkie Collins の Basil
における `sensation' をめぐって :
1850年代における「センセーション小説」の萌芽

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): Wilkie Collins, Basil, sensation キーワード (En): 作成者: 橋野, 朋子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006194

Wilkie Collins の *Basil* における ‘sensation’ をめぐって

——1850年代における「センセーション小説」の萌芽——

橋 野 朋 子

要 旨

本論は、1860年代初頭のイギリスにおいて「センセーション小説」と呼ばれる小説の新たなジャンルの一大流行を引き起こした作品である *The Woman in White* (1859–60) の著者、Wilkie Collins の初期の作品 *Basil* (1852) に見られる「センセーション小説」的要素を考察するものである。*Basil* の作品中に ‘sensation’ という言葉が多用されていることに着目し、当時の生理学的文献における ‘sensation’ の意味合いを参考にしながら、1850年代の小説の流れにおける *Basil* の特異性を明らかにし、「センセーション小説」の先駆的作品として位置づけられている *The Woman in White* だけでなく、*Basil* にも「センセーション小説」の要素が見られることを検証していくことが本論の目的である。

キーワード：Wilkie Collins, Basil, sensation

1. はじめに

1860年代初頭、ヴィクトリア朝イギリスにおいて、いわゆる「センセーション小説」と呼ばれる小説の新たなジャンルが一大流行し、読者がこぞって「センセーション小説」をむさぼり読む現象を受けて当時の批評家たちは、そのような「病んだ欲求」(cravings of a diseased appetite)¹⁾は「社会的な堕落を示すもの」(indications of a wide-spread corruption)²⁾であると警鐘を鳴らした。「センセーション小説」の創始者として位置づけられている Wilkie Collins の代表作、*The Woman in White* (1859–60) は「センセーション小説」流行の火付け役となった作品である。しかし、Collins の初期の作品 *Basil* (1852) は、作品中に意識的とも思われるほどに ‘sensation’ という言葉が多用されており、我々現代の読者には後に流行する「センセーション小説」を思い起こさせる。本論は ‘sensation’ の扱いに注目して、1850年代の小説の流れにおける *Basil* の特異性を検証し、「センセーション小説」の萌芽としての要素を考察していく。

2. Basil における ‘sensation’ と ‘thought’ の対比

(1) 「感覚的、身体的、性欲的」な ‘sensation’

Basil は、貴族の息子 Basil がロンドンを走るオムニバスで乗り合わせた Margaret Sherwin に一目惚れしたことをきっかけとしてストーリーが展開する。Margaret の父は生地商を営んでおり、血筋・家柄・名誉を重んじる厳格な父親を持つ Basil は、中産階級の娘との交際が「品位をおとしめる結婚」(a degrading marriage)³⁾ につながるものであり、自分が感情の誘惑に屈すればそれはすなわち自らの破滅を意味するものであるということを強く意識している。その心の葛藤を描くにあたり、Collins が ‘sensation’ と ‘thought’ を対比的に用いていることを見ていく。

Margaret に一目惚れした Basil は自分に起こった衝撃を次のように述べる。

The impression left by it [the sight of Margaret] made me insensible for the time to all bodily reflections, careless of exercising the smallest self-restraint. I gave myself up to the charm that was at work on me. Prudence, duty, memories and prejudices of home, were all absorbed and forgotten in love – love that I encouraged, that I dwelt over in the first reckless luxury of a new sensation. (38, emphasis added)

“Psychological Inquiries” と題した1855年の *Blackwood’s Edinburgh Magazine* の論説は、「脳」(brain) を中枢器官とする「意識」(human consciousness) を「思考」(thought) と「感覚」(sensations) の二つに大別している。⁴⁾ また、スコットランドの心理学者 Alexander Bain の著書 *The Senses and the Intellect* (1855) を紹介した *Fraser’s Magazine* の1856年の記事は、「心的現象」(mental phenomena) を「感覚能」(sensibility)、「行動」(activity)、「知力」(intellect) の3つに分類し、「感覚能」(sensibility) を「触感、感覚、受動的な感受」(the phenomena of feeling, sensation or passive susceptibility)、「行動」(activity) を「感覚によって促される意志、行動、自発的衝動」(the phenomenon of volition, effort or active impulse, prompted by feeling)、「知力」(intellect) を「思考、認知、理解力」(the phenomena of thought, cognition or intelligence) と解説している。⁵⁾ そしてそれらそれぞれが二層構造となっており、「感覚能」(sensibility) に関して、「下等で粗野で動物的」(lower / ruder / animal) な「感覚」(sensation) と「高等で洗練され人間らしい」(higher / finer / human) 「感情」(emotion) とに分け、「知力」(intellect) と関わりをもつものがすなわち「上層」に属するものであると説明している。⁶⁾ また、*OED* は ‘sensation’ を「五感の働き」(the operation or function of the senses) と定義し、「結果として生じる『認知』とは別個の身体上の『感覚』(a physical ‘feeling’ considered apart from the resulting ‘perception’ of an object) と説明している。このように当時 ‘sensation’ とは生理学的意味合いにおいて、「思考」(thought) による「知覚、

認知」(perception)を伴わない「感知」を示していたと言える。これらのことを念頭におくと、上記の引用において、‘the first reckless luxury of a new sensation’に身を委ねた Basil が ‘love’ と呼んでいるものとは、Bainが ‘sensibility’ を「上層」と「下層」とに分けたうちの「上層」に属するものとしている ‘emotion’ ではなく、あくまでも「下等で」「動物的な」感覚である ‘sensation’ なのである。

オムニバスに乗り込む Margaret に手を差しのべた Basil は、彼女の手に触れた瞬間を次のように描写する。

... how the sense of that touch was prolonged! I felt it thrilling through me – thrilling in every nerve, in every pulsation of my fast-throbbing heart. (29, emphasis added)

当時の生理学的文献は、「神経」(nerve)を ‘sensation’ が「刺激 (excite) される」場所であり、その ‘sensation’ を「精神」(mind)の機能が宿っているとされる「脳」(brain)に伝える経路であると説明している。⁷⁾ ‘nerve’ という言葉に注目するとこの描写は、「脳」に伝わって、結果として「思考」を伴う前の段階の「肉体的」感覚を表現していると言えよう。

The British Quarterly Review の1854年の論説、“The Philosophy of the Senses”は「思考力が何かに集中していれば耳の中を伝わる音の振動も感知されないことがある」と述べて、次のように「感覚」(senses)の認知が「精神」(mind)に対して従属関係にあることを説明している。

... the senses are dependent upon the attention the mind may bestow. The soul can insulate itself, as it were; or, locking up all the doors of its adytum, can exclude the impressions which solicit admission.⁸⁾

「思考」の「感覚」に対する優位が主張されているが、Basil の場合はその逆のことが起こっていると言える。文筆家を志す Basil はオムニバスで Margaret を見かけた晩、書きかけの原稿を前にしてもはや「思考力」が無力であることを感じる。

Stirring ideas; store of knowledge patiently heaped up; visions of better sights than this world can show, falling freshly and sunnily over the pages of my first book; all these were past and gone – withered up by the hot breath of the senses – doomed by a paltry fate, whose germ was the accident of an idle day! (41, emphasis added)

Basil は自分を襲った感覚が理性を墮落させるものであることを認めながらも、次のようにその感覚の「純粹さ」を主張する。

Deteriorating as my passion was in its effect on the exercise of my mental powers, and on my candour and sense of duty in my intercourse with home, it was a pure feeling towards *her*. (43)

しかしながら、Basil が ‘pure feeling’ と主張する Margaret に対する「情念」(passion)は、

作品中 ‘feeling’ ではなく、‘turbulent sensations’ (41) や ‘giant sensation’ (42) など、‘sensation’ という言葉で表現されており、先ほどの Bain の ‘sensation’ と ‘emotion’ との区別を参考にすれば、それは ‘thought’ という概念的なものを伴わない、「感覚的」なものであると言える。また、Basil が Margaret の「生温かい小刻みの息づかい」(her warm, quick breathing) (98) に誘われ彼女に初めて口づけをする場面において、Basil はその感触を ‘What sensations the kiss gave me then!’ (99) と ‘sensation’ という言葉によって表現しており、Collins は ‘sensation’ という言葉に「性欲的」な意味合いを暗示していると言えよう。

Collins は作品冒頭の「献辞」(Letter of Dedication) において、「リアリティ追求のために感傷小説のしきたりに背くことも厭わない」(Directing my characters and my story . . . towards the light of Reality wherever I could find it, I have not hesitated to violate some of the conventionalities of sentimental fiction.) (xxxvi) と宣言しているが、そのような挑戦的な姿勢はこのような Basil の「感覚的」な反応に表れていると言える。しかし、Basil が出版当初「礼節に対する蹂躪」(an outrage on their sense of propriety) (xxxix) として非難されたのは、Collins が作品中さらに踏み込んだ描写を試みているからである。

(2) Basil が妻の「不貞」を壁越しに聞き知る章に関して

諸々の事情で Sherwin 氏との間で Margaret と非公式に結婚するも一年間事実上の夫婦関係を持たないという取り決めをした Basil が、名実共に夫婦となることのできる日が翌日に迫った晩に妻の「不貞」の現場を聞き知る場面は作品の中核をなす。この場面が描かれている章でも Basil の「感覚的」な反応が強調されている。

パーティへ出かけた Margaret を迎えに行った Basil は屋敷から Sherwin 氏の仕事上の助手兼 Margaret の家庭教師でもある Robert Mannion が Margaret と連れ立って出て行くのを目撃する。二人が乗った馬車を追跡する Basil の全身を「奇妙な感覚」(a strange sensation) (158) が走る。馬車はあるさびれた宿の前で停まり、Margaret と Mannion は中へと入って行く。Basil は二人の後をつけようという「本能的な決意」(instinctive resolution) (159) に導かれて「直感的」「機械的」に行動する。「かじかんだ無感覚」(an icy insensibility) (160)、「何かに操られているような白日夢の感覚」(a dream-sensation of being impelled by some hidden, irresistible agency) (160) などと「思考」を遮断した無意識的な行動の描写が繰り返され、そのような感覚に襲われながら Basil は宿のボーイの案内に従って階段を上る。そして薄い仕切り板を通して妻の「不貞」を聞き知るのである。その時の反応は次のように「身体的」に描写されている。

I could neither move nor breathe. The blood surged and heaved upward to my brain; my heart strained and writhed in anguish; the life within me raged and tore to get free.

Whole years of the direst mental and bodily agony were concentrated in that one moment of helpless, motionless torment. I never lost the consciousness of suffering . . . and knew when the paroxysm passed, and nothing remained of it, but a shivering helplessness in every limb.

Ere long, the power of thinking began to return to me by degree.

(161, emphasis added)

最後の一文からも明らかなように、Basil の反応はすべて「思考力」が機能していない状態の「身体的な」感覚である。また、ここでは Basil を襲った「発作」を表現するのに ‘paroxysm’ という言葉が使われているが、当時の文学作品においては ‘paroxysm of laughter’ や ‘paroxysm of rage’ など、なんらかの感情の「激発」という比喩的表現で用いられていることが多いのに対して、⁹⁾ ここでは医学的な意味合いで用いられていることも注目に値する。

「思考力」の回復とともに、Mannion に対する復讐という「概念」が Basil を支配する。

ONE THOUGHT slowly arose . . . and cast down before it every obstacle of conscience, every principle of education, every care for the future, every remembrance of the past, every weakening influence of present misery, every repressing tie of family and home, every anxiety for good fame in this life, and every idea of the next that was to come. Before the fell poison of that Thought, all other thoughts – good or evil – died. As it spoke secretly within me, I felt my bodily strength coming back; a quick vigour leaped hotly through my frame. (161)

復讐心にかかられた Basil は Mannion を待ち伏せ、格闘の末 Mannion を路上に叩きのめす。半狂乱で興奮状態にあった Basil の目の前に Margaret が姿を現す。そして、妻の姿を見た Basil の「思考力」が次のように昏迷していく。

One long pang of shame and despair shot through my heart as I looked at her, and tortured out of its trance the spirit within me. Thousands on thousands of thoughts seemed to be whirling in the wildest confusion through and through my brain – thought, whose track was a track of fire – thoughts that struck me with a hellish torment of dumbness, at the very time when I would have purchased with my life the power of a moment’s speech.

(165)

沈黙のまま Margaret の腕をつかむ Basil に、もはや「思考力」は働いておらず、彼の行動を支配しているのは「決して離すまいとする本能的感覚」(the strange instinct of never losing hold of her) (165) であった。Basil は彼の手をすり抜けた Margaret を「本能的」に追いかけて街中をさまよったあげく、自分が「思考」も「感覚」も徐々に失いやがては意識が「忘却のかた」(utter oblivion) (167) に遠ざかっていくのを感じる。

I hid my face in my hands, and tried to assure myself that I was still in possession of my senses. I strove hard to separate my thoughts; to distinguish between my recollections; to extricate from the confusion within me any one idea, no matter what – and I could not do it. In that awful struggle for the mastery over my own mind, all that had passed, all the horror of that horrible night, became as nothing to me. I raised myself, and looked up again, and tried to steady my reason by the simplest means . . . The darkness bewildered me . . . A blaze of lurid sunshine flashed before my eyes; a hell-blaze of brightness, with fiends by millions, raining down out of it on my head; then a rayless darkness – the darkness of the blind – then God’s mercy at last – the mercy of utter oblivion. (167)

このように、Basil が Mannion と Margaret の密会を知る章では、Basil が初めて Margaret に出会った時の衝撃と同様に、Collins は「感覚的」なものを、「思考力」と切り離して描いているが、次の章で Basil が意識を取り戻す過程の描写においても、‘sensation’ と ‘thought’ の対比が著しく見られる。Basil は「完全な忘却状態」(utter oblivion) にあった後、「意識が頭の中で閃光を放った」(consciousness flashed like light on my mind) (158) と記録し、「まず感覚が戻り、そして思考力が戻り、そして全体像がつかめた」(I had sensations, I had thought, I had visions) (169) と分析し、その過程を次のように詳述する。

My first sensation . . . was of a terrible heat . . . After this, came a quick, restless, unintermittent toiling of obscure thought . . . Soon these thoughts began to take a form that I could recognise. (169, emphasis added)

人の頭脳における「思考」に至るまでのプロセスを分析したようなこの引用からも、‘sensation’ とは、「認識する」(recognise) という行為が付随しない、「身体上の感覚」であることが分かる。

3. 作品 *Basil* の評価

(1) 同時代小説の流れにおける *Basil* の特異性

以上見てきたように、*Basil* は Collins の生理的な「感覚」へのこだわりが色濃く表れた作品である。*Basil* が出版された1850年代は、‘popular literature’ もしくは ‘light literature’ などと称される中産階級読者層を対象とした小説において、「ドメスティック小説」と呼ばれるジャンルが主流を占めていた時代である。¹⁰⁾ 「ドメスティック小説」は、ブルジョワ的価値観をバックボーンに、中産階級の家庭を小宇宙として読者に「客間神学」(drawing-room theology)¹¹⁾ のお手本の数々を呈示するものであった。そのような小説の流れにおいて *Basil* は明らかに異質な作品であったと言えよう。小説家としての修業期間にあたる50年代、Collins が当時の小

説のあり方に対して批判的であったことは、試作的な短編を編集した短編集である *The Queen of Hearts* (1859) の一節に表れている。*Queen of Hearts* のヒロインは次のように主張する。

I’m sick to death of novels with an earnest purpose. I’m sick to death of outbursts of eloquence, and large-minded philanthropy, and graphic descriptions, and unsparing anatomy of the human heart, and all that sort of thing . . . Good Gracious me! isn’t it the original intention or purpose of fiction, to set out distinctly by telling a story? And how many of these books, I should like to know, do that? Why, so far as telling a story is concerned, the greater part of them might as well be sermons as novels . . . what I want is something that seizes hold of my interest . . . something that keeps me reading, reading, in a breathless state to find out the end.¹²⁾

これは明らかに「ドメスティック小説」が特色とするものに対する批判であり、ここで言う、読者が「結末を知りたい一心で息もつかずに読みふける」ような小説とは、まさに Collins の *The Woman in White* (1859–60) がきっかけとなり一大流行した「センセーション小説」に通じるものがあると言える。

上記引用に見られる主張と同様の趣旨の見解が“The art of story-telling”と題した1856年の *Fraser’s Magazine* の論説において展開されている。その筆者は「ドメスティック小説」の特色を次のように批判している。

We must shuffle off the traditional descriptions, the sleepy dialogue, the bits of scenery which have nothing to do with the action . . . We must go straight to the vital interest, and keep to it to the end.¹³⁾

筆者は論説の中で慣習やモラルにとらわれないフランスの作家たちを高く評価し、イギリスでは「情念」(passion)が「風土的・倫理的制約」(the restraints of our national manners and our moral code)によって抑え込まれていると批判し、小説のあるべき姿を次のように主張する。

Whatever men are congregated together, there are human passions, hopes, desires. The inner life is much the same everywhere. It is the external life, modified by social, moral, and physical circumstances, that presents the most material differences. The story in which the former is taken as the basis of the interest, and the latter as the vehicle, must make itself felt it be true to its design. English story-tellers have seldom grasped both.¹⁴⁾

「前者」すなわち人間の内面が小説において「興味の中心」(the basis of the interest)となるべきであって、「後者」すなわち社会的・道徳的要素が作用した外因的な事柄はあくまでも「前者」を描くための「媒体」(vehicle)であるべきだというのがこの主張である。人物・事物を詳細に描写し、中産階級的イデオロギーに基づいたモラルを読者に説く「ドメスティック

小説」は、この主張と照らし合わせてみれば、「後者」が作品の中心でありかつ全てであると言えよう。それに対して *Basil* は、中産階級の家を舞台として「ドメスティック小説」の体裁をとりながらも、そこには中産階級の「家庭という閉ざされた劇場」(the secret theatre of home) (76) の中に渦巻く欲望・憎悪・情念といった人間の内面が赤裸々に描かれている。今まで見てきたように、作品中多用されている‘sensation’という言葉が象徴するように *Basil* ではそういった人間の内面が「生理的」、「身体的」なものとして描かれている。“The art of story-telling”の主張に基づけば、*Basil* は「ドメスティック小説」特有のブルジョワ家庭を「媒体」(vehicle)として、「感覚的」な人間の内面を「興味の中心」に描いた作品であると言える。

(2) 出版当時の *Basil* に対する評価

Basil が「ドメスティック小説」特有のブルジョワ家庭を「媒体」としながら、「感覚的な」人間の内面を「興味の中心」に描いた作品である点は、当時の批評家たちに違和感・不快感を与えたようである。1852年の *Bentley's Miscellany* に掲載された *Basil* の書評はその違和感・不快感を次のように説明している。

There is a startling antagonism between the intensity of the passion, the violent spasmodic action of the piece, and its smooth, common-place environments. The scenery, the dramatic personae, the costumery, are all of the familiar, every-day type, belonging to an advanced stage of civilization; but there is something rude and barbarous, almost Titanic, about the incidents; they belong to a different state of society.¹⁵⁾

Basil における‘sensation’という言葉にこだわった「身体的」な描写が、上記引用における‘spasmodic’、‘rude’、‘barbarous’、‘Titanic」といった表現を招いたと思われる。とりわけ、*Basil* が妻の「不貞」を聞き知る場面に関しては、「底知れぬ退廃」(the lowest abyss of [vices] degradation)¹⁶⁾、「動物的な欲望の詳細」(the details of animal appetite)¹⁷⁾が描かれているとして、それに対する Collins の意図的な姿勢が批評家たちの反感を買った。*Westminster Review* は次のように非難している。

There are some subjects on which it is not possible to dwell without offence; and Mr. Collins having first chosen one which could neither please nor elevate, has rather increased the displeasure it exercise, by his resolution to spare us no revolting details.¹⁸⁾

Collinsが「献辞」の中で表明した「リアリティ追求のためには感傷小説のしきたりに背くことも厭わない」という決意のとおり、小説の慣習に挑戦する形で、人間の「生理的」、「感覚的」、「本能的」な部分を描くために「ドメスティック小説」特有の中産階級の家を「媒体」としたことが当時の批評家たちの非難を招いたと思われる。

4. まとめ

Collins の小説の慣習に対する挑戦的な姿勢が色濃く反映された作品である *Basil* は当時の批評家たちの多くに「違和感」「不快感」を与えた。しかし、“The art of story-telling” の論説に見られるように、当時を代表する「ドメスティック小説」に対する批判的な見方は一部存在し、*Gay Science* (1866) の著者である批評家 E. S. Dallas も「ドメスティック小説」が「詳細な人物描写」(the delineation of character and of manners) にこだわるあまりにストーリー性を欠き、「眠気を誘うまでに単調なもの」(a soporific dullness) に陥っていると指摘している。¹⁹⁾ また Dallas は1859年、「センセーション小説」流行の前夜とも言える時期に、*Blackwood's Edinburgh Magazine* の“Popular literature”と題した論説の中で、「小説ですら思索に溢れる今の時代、人が『思考』(thought)を離れて『感覚的なもの』(sensation)を求めるようになるのは必然である」と主張し、次のような一説で論をしめくくっている。

... not because we are less intellectual, but because it is a necessity of our existence ... we should fly thought, and cultivate sensation.²⁰⁾

この記事は *The Woman in White* が雑誌 *All the Year Round* に掲載され始める数ヶ月前のものであり、いわゆる「センセーション小説」という言葉がまだ誕生していない時期における Dallas のこの一節は注目に値する。

1850年代は後半にかけて読者が「感覚的なもの」を欲するようになる過渡期にあたり、1860年代に、にわかに社会現象となった「センセーション小説」の流行の土壌となるような見解が多数派でないにしろ存在していた。*Basil* はそのような見解を先取りしたような作品であると言える。1855年、Margaret Oliphant は *Blackwood's Edinburgh Magazine* の“Modern Novelists – great and small”と題した論説の中で、おそらくは作品中多用されている‘sensation’という言葉が敏感に感じ取った結果であると思われるが、次のように‘sensation’に引用符を用いて *Basil* に関して述べている。

The “sensation” which it is the design of Mr Wilkie Collins to raise in our monotonous bosom, is —— horror.²¹⁾

ここでの Oliphant の‘sensation’の意味合いは、*OED* における「ある出来事や状況によって刺激される恐怖・期待・好奇心などの強い感情」という定義にあたり、この定義はさらに「文学や芸術作品の効果として生み出される激しい感情」と説明されている。1855年の時点でのこの Oliphant の‘sensation’という言葉はまさに1860年代の「センセーション小説」を形容する際に用いられた‘sensation’と同義であると解釈できる。*Basil* は「センセーション小説」の先駆的作品とされる *The Woman in White* 以上に先駆的な作品であると言えることができる。

註

- 1) H. L. Mansel, “Sensation Novels,” *Quarterly Review* 113 (Apr. 1863): 483.
- 2) Mansel, 482.
- 3) Wilkie Collins, *Basil* (1852. Oxford: Oxford U.P., World’s Classics, 1990), 42. 以下、同作品からの引用は本文中にページ数で示す。
- 4) “Psychological Inquiries,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* (Apr. 1855): 402.
- 5) “Bain on *The Senses and the Intellect*,” *Fraser’s Magazine* (Feb. 1856): 214.
- 6) “Bain on *The Senses and the Intellect*,” 215.
- 7) “Psychological Inquiries”、“The Philosophy of the Senses”を参照。
- 8) “The Philosophy of the Senses,” *The British Quarterly Review* (Apr. 1854): 433-434.
- 9) 例えば、‘paroxysm of emotion’ (*Jane Eyre*)、‘paroxysm of pain’ (*North and South*)、‘paroxysm of rage’ (*Mill on the Floss*)、‘paroxysm of despair’、‘paroxysm of ungovernable passion’、‘paroxysm of helpless fear’ (*Wuthering Heights*) など。
- 10) ドメスティック小説に関しては、Nicholas Rance, *Wilkie Collins and Other Sensation Novelists* (Rutherford: Fairleigh Dickinson U.P., 1991) の第2章及び、Arlene Young, *Culture, Class and Gender in the Victorian Novel: Gentlemen, Gents and Working Women* (London: Macmillan, 1999) の第1章などを参照。
- 11) “The Progress of Fiction as an Art,” *The Westminster Review* 60 (Oct. 1853): 361.
- 12) Wilkie Collins. *The Queen of Hearts* (1859 Doylestown: Wildside Press) 43.
- 13) “The Art of story-telling,” *Fraser’s Magazine* 53 (Jun. 1856): 732.
- 14) “The Art of story-telling,” 730.
- 15) “*Esmond and Basil*,” Bentley’s Miscellany (Dec. 1852): 586.
- 16) “A Trio of Novels,” *Dublin University Magazine* (Jan. 1853), in Norman Page (ed.) *Wilkie Collins: the Critical Heritage* (London: Routledge, 1974) 51.
- 17) “The Progress of Fiction as an Art,” 373.
- 18) “The Progress of Fiction as an Art,” 372-373.
- 19) E. S. Dallas. *The Times* (17 Oct. 1861).
- 20) E. S. Dallas. “Popular Literature —the periodical press,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* (Jan. 1859): 111.
- 21) Margaret Oliphant. “Modern Novelists —great and small,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* (May 1855): 566.

(はしの・ともこ 外国語学部講師)